



撮影：山田新治郎（表紙、並びに当ページ）

石の教会 内村鑑三記念堂

長野県軽井沢町

時代と国境を越えて思想が建築に昇華——。
長野県軽井沢の「石の教会 内村鑑三記念堂」はまさにそうした建築だ。神が創造した天と地のすべて（天然）が祈りの場であるというキリスト教思想家・内村鑑三氏の根幹思想、「無教会主義」を肌で感じることができる。設計は、米国の建築家で有機的建築（オーガニック建築）の旗手、ケンドリック・バングス・ケロッグ氏。彼の感性と技術が思想を形にした。

二人の活躍した時代は違う。内村氏が明治・大正期、ケロッグ氏が昭和から現代。その二人を結び付けたのが、星野温泉旅館三代目・星野晃良氏である。星野温泉は軽井沢を創業の地に持つ星野リゾートの前身。一九二二（大正十）年、星野温泉で開かれた文化人らによる「芸術自由教育講習会」に内村氏が講師で参加したことから、晃良氏の父である二代目・嘉政氏と親交が生まれた。嘉政氏を通じ内村氏を尊敬していた晃良氏は、内村氏の想いを伝える場がほしいと考えるようになった。晃良氏が米国に滞在していた時、偶然出会ったケロッグ氏による設計の建築に衝撃を受け、すぐさま会いに行つたのだという。これが運命の出会いだった。

ケロッグ氏は、同じ米国の建築家、フランク・ロイド・ライト氏の影響を受け、自然と調和した建築を目指していた。晃良氏から聞いた内村氏の思想に深く共鳴、自身の建築と本質的な重なりを見出した。建物は、軽井沢の丘の豊かな自然の中に溶け込むように佇む。石とガラスのアーチが交互に織りなす独創的なフォルムは息を呑む美しさだ。太陽の軌道に合わせ緩い弧を描き、礼拝堂を南向きに設置することで常に光が差し込む。

一歩中に足を踏み入れると、そこは石と光と水の別世界が広がる。すべて違う形の自然石を積み上げた壁とその壁を静かに流れる滝、高い天井から降り注ぐ自然光に囲まれ、自然の中に居るような開放感に満たされる。この静謐な祈りの空間は、特定の時代に属さない「タイムレス」な建築と言えるだろう。



アーチが象徴しているのは、「時の流れ」と「調和」である。19本のアーチは入口で横になっているが、人が成長するように徐々に立ち上がっていく。人生の歩みという時の流れの表現である。そして堅固な石のアーチが支えるガラスからは光明がもたらされ、石とガラスが調和を生んでいる。これは、人と人、人と自然も美しく調和できるという神の願いを形にしたものだ